病院図書館　2003；23(2)：60-69

第100回研修会 座談会

近畿病院図書室協議会の歩みと未来への期待

日時：2003年1月24日（金）15：15～16：30
場所：大阪労災病院
出席者：山室眞知子（京都南病院）
　　首藤　佳子（星ヶ丘厚生年金病院）
　　山崎　捷子（淀川キリスト教病院）
　　重富　久代（京都市立病院）
　　松本　純子（住友病院）
司　会：小田中徹也（国立京都病院）

Ⅰ．はじめに

第100回研修会を記念し、近畿病院図書室協議会（以下、病図協）の創設時に活躍された5人の会員の方々をお招きいたしました。今日は、その頃のお話を伺い、現在の病図協活動あるいは病院図書館活動を検証するとともに、今後を引き継ぐ若い病院図書館員へ資するヒントをいただきたいと思います。なお、この企画はシンポジウムではなく、座談会のような気楽さでお話しいただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

そこで、この座談会でははじめ2／3ほどの時間を使って、つまり午後4時5分頃まで、研修部が用意した14の質問事項について、先輩の皆さんにお話を伺います。時間的な制約もありますので、お答えは、今日の研修会に参加された後輩の方々に参考になる範囲で、できるだけ簡潔にお答えいただければありがたいと思います。その後、残り1／3の時間（4時30分まで）を使って、今日話題になった項目、あるいはその他の事柄について、皆さんと質疑応答を行いたいと思います。

Ⅱ．病図協と私

自己紹介

司会（小田中）：最初に、先輩方の病図協への関わりのあたりからお伺いしたいと思います。その前にまずは、全員のご氏名と所属機関名をご紹介いただけますか。また、差し支えなければ在職期間も教えていただければありがたいのですが。

山室：京都南病院の山室です。在職期間は、この協議会の設立当時すでに在職していましたので、28年以上ということになります。

首藤：星ヶ丘厚生年金病院に所属しています。在職期間は28～9年になります。

山崎：淀川キリスト教病院の山崎捷子です。在職期間は医局秘書との兼務を12年間、図書室専従になってから18年間です。

重富：京都市立病院の重富です。在職うん十年で、半分は庶務や病歴との兼務で、その後は専任で今日に至ります。

松本：住友病院図書室の松本純子です。在職期間はこの3月で31年になります。

司会：ありがとうございました。皆さんそれぞれ、この四半世紀以上の永きに亘って病院図書室を支え、その発展に尽くされてこられたわけですね。その間、病院あるいは図書館、また医学情報環境にはいろいろな変遷があったことと思います。後でそのあたりのことをお伺いしましょう。

病図協創設時代

司会：次に病図協創設時代、つまり設立から約10年間の頃の思い出を、皆さんが携わった役割に関連してご紹介ください。また、現在の病図協活動とどの点で変化があったか、一方、どんな共通点があるかもコメントいただけますか。皆さん全員にお伺いいたします。

重富：昭和49年11月の設立から昭和62年3月まで、中途での休みもありましたが、幹事として研修と総務と会計をしたと思います。はじめは研修会の担当でした。その頃は、幹事会も会報編集も同じくほとんど毎月会合を持っていました。それは若さもありますが、そのときの原動力は、図書室を取り巻く環境がすべてに“ゼロからの出発”であったこと。司書資格はあったものの、飛び込んだ図書室が見たこともない専門書を扱うところであったため、その運営管理に自分自身が研修をしなければならないという気持ちが大きな力となったと思います。

その頃、大学図書館のネットワーク組織である日本医学図書館協会（JMLA）は偉大で、本当に敷居の高い存在でしたが、そこに頼らざるを得ない時期であったし、実際、その道での先輩諸氏に教えられ、支えられました。病院図書室のルーティンを理解するため、日常業務を一つ一つ取り上げ研修を重ね、その上での問題点をあとには事例報告として研修していきました。会の世話をしながら自己研鑽をしていったように思います。

首藤：私は設立後約2年半事務局長を担当しました。その後会報編集、研修会を担当しましたが、いずれも初めての経験で、大変勉強になりました。この座談会のために当初の会報を読み直しましたが、病院図書館の役割や課題に対する認識は現在を先取りしていまして、図書館が病院情報サービスの拠点となるべきであるとか、医療における社会的な役割とネットワークの意義（閉鎖性の打破と医療機関相互の連携、地域社会からの遊離の克服）、設置基準の必要性、人的資源の重要性などがすでに指摘されています。また、山室さんがいらしたお陰でしょう、第3回総会では患者さんへの図書サービスもすでに項目に挙がっています。

現在の病図協活動との大きな違いは、当初は管理者を含めた討論が活発に行われていたこと、大学や関連団体との連携がより組織的であったこと、組織拡大が大きな課題であったことなどでしょうか。ネットワークの目的として、「相互という理念ではなく、公共という理念で運営されるべきである」とか、「病院図書館やネットワークの立ち後れの真の原因は、経済的なものではなく、思想や実践の貧困である」といった議論が見られて、管理者、担当者ともに理想に燃えていたんだなと懐かしく思いました。

山室：現在は病院図書室のネットワークができていますが、当時はそのネットワークがまったくありませんでした。まず病院図書室の存在すら知られていませんでしたので、JMLAの研修会にも参加させてもらえませんでした。ですから、この病院図書室間のネットワークができたということは大きな喜びでした。病院図書室同士の仲間と交流できる喜びで設立当時は毎月研修会を開き、会報を発行して情報を交換し合いました。病院図書室同士の協力でやらねばならないことが山積していました。今から思いますと当時は皆熱意に燃えていました。

若い方々はご存知ないでしょうが、その当時はゼロックスがようやく大規模の病院に試用期間として使われ始めた頃で、もちろんコンピュータもワープロもありませんでした。当時、アメリカの病院図書室ではすでにFAXが導入され、所蔵されていない文献を朝依頼すると午後には届いているという時代でしたが、私たちはFAXという言葉さえ知りませんでした。

それともう一つ今との大きな違いは、首藤さんも言われたとおり、病院管理者が非常に熱心に応援してくださったということです。この協議会は機関加盟ですから、以前は役員会には幹事病院の院長も出席されていましたが、今は病

院経営の事情が非常に厳しい状態にあり、役員会への出席もお願いしにくい情況になっています。

山崎：星ヶ丘厚生年金病院で行われた病図協の発足総会には出席させていただきました。その後、子供達が小さかった頃は研修会にも参加できなかったのですが、子供から手が離れてからは、極力参加するように心がけています。1986年から現在まで幹事をさせていただいています。役割は研修部、編集部をさせていただき、現在は事務局の総務を担当しています。松本さんが研修部長のときに研修部だったのですが、部員数は２～３人だったと思います。あの頃は、全国図書研究会が関西で開催されたときは病図協がプログラムを企画したこともあって、準備等大変でした。

松本：設立時から今日まで約28年半、幹事として協議会活動に携わってきました。勤続年数の大半を協議会とともに歩んできたことになります。担当は研修部員として６年、その後、事務局、総務、統計調査部、研修部と変わり、現在は会計係をしています。

この間を振り返ってみると、研修部員だったときのことが最も印象に残っています。実務中心に始まった研修会は、３年目には病院管理者や図書館利用者をパネリストに迎えて開催したパネルディスカッション、その後、研修部を中心に会全体で取り組んだ日本病院会主催全国図書研究会の共催、中国四国地方病院図書室研修会・名古屋研修会の開催など、研修活動に大変意欲的だったことがわかります。しかし、今日では研修チャンスは周りにいっぱいあります。受講者が研修会を選べる時代ですから、研修テーマの選定やどのような形式で研修会を行うかなど課題も多いと思いますが、若い方々の発想で魅力ある研修会にしていってほしいですね。

司会：私が病図協へ関わったのは、この「創設時代」の後半からでしょうか。この頃のある種の熱気は、皆さんがおっしゃるとおり知的渇望があったからでしょうが、病院図書館を何とか一人前にしたいという志も高かったのでしょうね。あの頃から較べれば、現在はインターネットを中心とする情報環境の大変化、あるいは会員数の増加や地域的拡大もあって、同じようにはいかないかもしれませんが、その精神のようなものは受け継いでいきたいと思っています。また皆さんの中には、現在まで役員を続けてこられた方々、あるいは委員や部員として、一貫して病図協を支え、事業活動に協力していただきました。本当に感謝しております。それが、皆さんが若さを保っておられる秘訣だったのかもしれませんね（笑）。

Ⅲ．司書の役割

病院における司書とは

司会：さて次に、この座談会を企画した研修部がまとめたいくつかの質問に沿って、お伺いしたいと思います。司書といえばまず思い浮かぶのは公共図書館での役割ですが、病院において司書として図書館活動を進めてこられた感想は如何でしょうか。特に、日本における患者さんへのサービスでは先駆的な役割を果たされた山室さんに、対専門家と一般利用者との違いなども含め、お伺いします。

山室：私が病院図書室での患者さんへのサービスを考えた発端は、かつて大学図書館に勤務していた経験からです。大学図書館でのサービスは教育者と学生です。つまり教育をする側の利用と教育を受ける側の利用です。では何故、病院図書室では治療する医師ら医療スタッフだけで、治療を受ける患者さんの利用はないのだろうかという疑問を持ちました。治療を受ける患者さんにもそれなりの知識が必要ですから。このことは最近になって認められるようになって、

患者図書室が多くの病院に設置されるようになりました。病院図書室の司書として活動を進めていくためには、対専門家にも一般利用者に対しても司書は情報提供の専門家であるという自覚と自負を持つことだと思います。それがないと病院図書室の司書の存在意義がなくなってしまいます。言うまでもなくそのためには、研修会に参加し知識を高めるための努力が必要です。

司会：病院図書館で患者サービスを始めた発端が、大学図書館での経験でしたか。ある意味で意外でした。それはともかく、病院において「司書は情報提供の専門家であるという自覚と自負」、これはそのとおりだと思います。それを目指して自己研鑽し、医療者へはもちろん、患者さんあるいはその家族の人たちにもサービスを展開していくことが大切だということですね。

病院図書館業務で大切なこと

司会：次はなかなか難しい質問かと思いますが、これまでの経験から、病院図書館業務の中で最も大切なことは何だとお考えでしょうか。重富さん、山室さん、首藤さん、何点かお教え願えませんか。

重富：病院図書室業務を3つに大別すると、(1)本の選書・収書と受入から整理の業務、(2)それと切り離せない予算などの費用の仕事、(3)利用者へのサービス(いわゆる情報提供や広報活動)、があると思います。それらを支えるのが担当者自身の研修や、図書館間のネットワーク強化などでしょう。どの業務をとっても重要であり、大切な仕事であるので、やはりそのバランスがとれていることが理想的だと思います。

現在のように、インターネットをはじめとする電子化は避けて通れない時代となり、その環境を整えることと、そのためのスキルアップが必要となり業務が広がっています。最近の『医学図書館』に「蔵書のメンテナンス」という特集がありましたが、病院図書室の担当者がほとんど一人であることをふまえ、広く図書室のメンテナンスを医療の状況に見合ってどうするかということを考える必要があるのではないかと思っています。

山室：研修を重ねるということ、自分を磨くということが、やはり利用者に良いサービスをするためには必要だと思います。ただ大事なことは「決して病院の中で孤立してはいけない」ということです。どんなに自分を磨いて知識を高めても、図書室が孤立していては利用者に司書の役目も図書室のサービスもわかってもらえません。それでは図書室もせっかくの司書の知識も役に立ちません。まず病院の各部署との交流を持つこと、各部署の仕事を知ること、その上で図書室のどんなサービスが病院のために役立つか、ということを考えていかねばならないと思います。

まず院内のスタッフから、医学情報以外のことでも何かわからないこと、調べたいことがあったら「まず図書室で」と頼りにされたら成功です。病院の図書室ですからレファレンスワークは医学情報だけではなく、一般的な質問であっても「わかりません、資料がありません」で利用者を帰してしまっては、利用者から頼りにされなくなります。医学情報関係以外の質問には関係資料が乏しいので難しいですが、今はインターネットが頼りになりますし、少しでも手がかりを提供してあげたいと思います。図書室の価値を認めて貰うチャンスにもなります。

自ら医学専門情報についての研修をしながらも、一方では一般的な問題を解決する知識も必要であり、そのようなレファレンスにも蔑ろにせず、真剣に応えていかねばならないのが病院図書室だと思います。

首藤：図書館業務としては、レファレンスワーク、コンサルテーションなど人的なサービスが最も大切だと思います。また、仕事に対する姿勢では、ねばり強さが大切なのではないかと思います。諸事万端思うに任せないことが多い病院図書館では、たとえすぐに達成できないことや解決が望めないことがあっても、目的に向かって情熱を絶やさず、軸足のぶれないスタン

スを保つことが必要です。それから、一人職場の欠点を補う工夫は大切なのではないでしょうか。恣意に流されないためには、短期的、長期的な図書館運営の目標を決めて計画的に仕事を進めること、院内でスムーズに仕事を進めるためには、他部門とのコミュニケーションを良くすること、また、「井の中の蛙」にならないよう外部との交流を進め、自己研鑽を怠らないことも必要です。

司会：さすがに大先輩の経験に基いた貴重な教訓、ありがとうございました。特に「病院の中で孤立してはいけない」あるいは「井の中の蛙にならない」という言葉は意味深く、病院の内外で広く交流、連携していく必要性がおわかりかと思います。ここに挙げられた具体的な業務あるいは心構えについて、若い方々がいきなりすべて見習うというわけにはいかないかもしれませんが、そのいくつかでも参考にしていただければと思います。

図書館ネットワークで大切なこと

司会：ところで、図書館ネットワークの果たす役割は、特に病院図書館の場合、計り知れないほど大きいものがあったと思います。そのネットワークにおいて最も大切だと思われることを挙げていただけますか。首藤さん、松本さんにお聞きします。

首藤：ネットワークはある目的のために作られるものですが、数年に一度は見直しをはかり、新たな展望を切り開いていくことが大切だと思います。こうした組織は一度作られますと、それの維持継続が目的化したり、また形骸化、硬直化してしまいがちですが、これは決して良いことではありません。それから、ネットワークの形態にはさまざまな形がありますが、例えばこの病図協の場合ですと機関加盟ですが、こうした組織形態の利点を最大限引き出せるような運営の工夫が大切ではないかと思います。

松本：病図協が発足したのは私が入職して2年半ほど経ったころでした。今まで見たこともない医学専門書に埋もれ、院内に尋ねる人もなく、大変不安な状態で仕事をしていました。全国で初めての病院図書館のネットワークとして病図協が生まれたのはそんなときで、同じ職種同士の横のつながりができたことは、今から思えば画期的なことだったと思います。

以前、協議会活動の一環として会員委託の6つのサービスセンターがありました。これは機関加盟だからこそできたことですが、時の移り変わりとともに今日ではそのほとんどが役割を終えています。その中に、地域ごとに実務研修指定病院を設け、新人会員はカリキュラムに沿ってその病院で指導を受けることができるシステムがありました。このようなセンターはまた復活しても良いかもしれませんね。これからも会員同士が協力して、病図協という病院図書館のネットワークを維持、発展させていっていただきたいと思います。

司会：図書館員の教育啓蒙あるいは図書館機能の両面で、図書館ネットワークの役割は極めて大きいが、その形態やあり方は目的達成のために絶えず見直していかなければならない、ということですね。病図協でもこれまで、JMLAへの団体加入交渉、名称変更の検討、あるいは組織内では事業部局化などに取り組んできましたが、今後はもっとドラスティックな変革が必要かもしれませんね。それこそ、病院図書館でこれから働く若い方々の大きな課題でもあると思います。日本の医療の質を情報分野で支えていくという気概を持って、取り組んでいただきたいと思っています。

資格認定制度

司会：病院図書館員の資格認定制度について、病院図書室研究会との共同事業化は中止となりましたが、それに代わる、例えば「スキル・レベルチェック制度」のようなもので病院図書館員のレベル確保の必要性はないか。これについて、元認定資格制度委員長の首藤さんにお考えをお聞きしたいのですが。

首藤：レベル確保の必要性は今後ますます重要になってくるのではないかと思います。日常業務の質の向上に、図書館員および図書館機能の水準化のために、また社会に向けての職業的なアピールのために、必要だと思います。日本には医学図書館員として系統だった教育を受ける機会がありませんので、こうした制度を利用して勉強するのが合理的だと思いますね。

司会：その後、JMLA でも「認定」制度の事業化に取り組んでいるようですが、JMLA を超えた病院図書館員も視野に入れたものかどうかは不明です。また、その内容が首藤さんが言われるような教育的側面、さらに、守るべき職業倫理の側面も確保したものかどうかも不明です。私見ですが、こうした面が揃って初めて、その専門性を社会に向けて職業的にアピールできると思うのですが。

図書館への病院の理解

司会：長年、病院において図書館員として働いてきた過程で、あるいはネットワーク活動に携わった中で、病院は図書館（室）に対して理解が深まったでしょうか。例えば、他の部署への異動などの話が出なかったか。あるいは、地位や身分の安定化などがあったでしょうか。山崎さん、如何でしょう。

山崎：私の場合は、1990年から1996年まで当協議会の会長を務められた前院長の白方先生が「病院はハードだけでなく、ソフトが良くなければ、良い医療はできない。そのためには図書室の充実が重要である」というお考えでしたので、先生自ら図書委員長をしてくださり、叱咤激励していただきました。医師、看護師、その他の職員も図書室の必要性を理解していると思います。以前に異動の打診があったときは、「白方先生が会長をされているので、異動はできません」とお断りしました。

司会：会長職を逆手に取った、スゴイ断り方でしたね（笑）。白方先生には当時、大変お世話になりました。ご自宅が西宮なので、阪神大震災のときは本当に心配しました。また、その前年の20周年記念のときにはいろいろご援助いただき、盛会裏に記念事業を為し得たと思っております。淀川キリスト教病院の場合、情報・図書館に対する院長の考え方、方針が大きく幸いしたとも言えますね。こうした考え方を持つ院長が増えてほしいものだと思います。

Ⅳ．現下の具体的な課題

患者サービス

司会：最近とみに患者サービスがマスコミでも取り沙汰されるようになりましたが、患者図書サービスを開始するとすれば、現在の医学情報の提供をメインとする病院図書館が、これを開放することで可能かどうか、またスタッフの増員は必要ないか、そのあたりについて山室さんにお考えをお聞きします。

山室：まず現在開設されている患者図書室は、大きく４つの形態で行われています。具体的に言いますと、(1)ボランティアによる一般図書の読書サービス、(2)公共図書館が病院へ出向いての読書サービス、(3)ボランティアと病院図書室司書（担当者）による読書サービスと健康図書による医学情報サービス、(4)患者さんや一般の人々に病院図書室と医学専門図書を公開、という４形態です。開設の動機が、病院図書室司書（担当者）からの提案の場合は司書（担当者）がサービスに関わっていますが、病院管理者からアメニティなどの目的で開設された場合はほとんどボランティアさんに任されているようです。「病院図書室の担当者は手を出すな」と言われている病院もあります。患者さんにどんなサービスをするかによって患者図書室の設置形態が決まるのではないでしょうか。

大事なことは、誰でも巷の書店で購入できる医学書ではなく、たとえ一般向きの医学書（健康図書）であっても病院では確かな情報を提供したい。例えば、せめて医学専門の出版社から発行されているもの、著者がその分野の専門医であることなどの選択は必要です。そのために

は、ボランティアさんだけに任せていて良いのだろうかという疑問はあります。できるだけ病院図書室の担当者の協力は必要ではないでしょうか。

今年の4月から教育病院に設置が義務付けられているアドボカシー室（厚生省では患者相談室）と関連付けて設置される患者図書室でのサービスの目的は、医学情報の提供でなければならないと考えます。病院図書室を公開して司書が情報を提供するのが理想的ですが、まず図書室の立地条件、病院管理者、特に医局医員の意向、図書室司書（担当者）の意識が一致しなければならないという条件があり、まだ当分の間は非常に難しいと思います。

司会：私は一昨年、山室さんたちが編集執筆された『患者さんへの図書サービスハンドブック（情報バリアフリー叢書）』（東京：株式会社大活字；2001）を読み、会誌に書評まで書かせていただきました。ここには今、山室さんが言われたさまざまな形態の患者サービスが具体的に紹介されています。まずはこうした本で先人の例を知り、それらと重ね合わせて、ご自分の病院での可能性を検討してみるのも一つの方法かと思います。

電子ジャーナル化

司会：インターネット時代となり、電子ジャーナル化が普及しつつありますが、印刷体の医学情報、つまり現在の形の医学雑誌あるいはテキストブックなどは、今後も必要あるいは残ると思いますか。また、医学情報の電子化時代における図書館員の役割についても何かお考えがあればお聞きしたいのですが。松本さん、如何でしょう。

松本：医学情報の電子化はさらに進み、将来、病院図書館でも電子情報が占める割合は大きくなっていくと思います。当院図書館でも最近電子ジャーナルを利用する機会が増え、特に雑誌が製本中のときは大いに助かっています。画像は雑誌からコピーするよりPDFをプリントする方がずっと鮮明です。電子ジャーナルの恩恵を受けているわけですが、しかし私は雑誌や単行書といった印刷媒体はなくならないと思っています。出版社は現在暗中模索しているところらしいですが、営利的側面から考えると損をしない方向に進むでしょうし、また「冊子体をなくすつもりはないらしい」との情報も耳にしています。一方で、学術研究者は概して「紙の媒体で出版することを好む」という話もあります。電子媒体と紙媒体、それぞれメリット、デメリットがありますので、両者の価値を正しく把握しておくことが必要かと思います。

図書館員の役割としては、さまざまな電子情報が使いこなせ、利用者に提供あるいは指導できること。さらに、電子化が進むほど図書館のコンピュータ環境の整備や図書費予算といった、病院の理解を得なければ解決できないことがたくさんでてきます。図書館を運営していく上でも司書の役割は増すのではないでしょうか。

司会：なるほど。情報の電子化は進んでも、紙による印刷媒体は残るということですね。私も、両方の長所の面が活用、つまり商品化されていくと思います。ただし、学術情報の分野ではやはり電子媒体の比重が大きくなると思います。その意味で、おっしゃるとおり図書館員のコンピュータ・リテラシーは今後ますます欠かせない資質だと思いますね。

病院図書館からの情報発信

司会：病院あるいは医療の中で、図書館の役割あるいは重要性と言ってもいいのですが、それを広く知ってもらう効果的な方法には何があるでしょう。これは院内あるいは対社会的の双方の側面があると思いますが。重富さん、山崎さんにお伺いします。

重富：以前から図書室の役割というと、創設期の目標であった「利用者のニーズにあった図書室をつくる」ことが、今も前提でありますが、図書室を取り巻く環境の変化から、広く「医療のニーズにあった図書室」と言い換えた方

がいいでしょう。IT 化が進み、文献検索が利用者のパーソナルな部分になってくると、その支援のためのコンピュータ・リテラシーを磨くこと、マニュアルをよく理解していることなども有効ではないでしょうか。

また、図書室のサービスを理解してもらうこととして、当図書室では新人を対象にオリエンテーションの実施、図書室案内の配布、それらを、ときには PowerPoint のスライドショーで説明しています。また、院内の電子掲示板やメールを活用し、「図書室 NEWS」、「新着図書・特集速報」の配信。あるいは院内イントラネットで簡単な図書室のホームページを設け、目録情報を利用してもらうなどの便宜を図っています。

山崎：病院図書室の役割は「最新の情報を利用者に提供すること」であると思います。当院ではそのために、新着雑誌のコンテンツサービスを行っています。臨床に忙しい医師のためには、各科ごとに新着雑誌を回覧し、その回覧用紙を利用して、その雑誌の注文も同時に受け付けるシステムにしています。看護師には、ユニフォームに着替えるロッカーの前の掲示板に、看護関係の新着雑誌のコンテンツをある一定期間掲示して、情報の提供を行っています。ナースが「掲示していた雑誌の号が見たい」とよく尋ねてきます。管理職には雑誌「病院」「日系ヘルスケア」等の新着のコンテンツを配布して、希望する個所のコピーサービスも行っています。コピー希望は多く、1カ月に30件以上のコピー希望があります。また、全職員に個人図書購入のお世話もしていますが、1カ月に200件以上のこともあります。

司会：かなり具体的にご紹介いただきありがとうございました。重富さんの IT 化時代らしい PR 活動、山崎さんの古典的とはいえ木目細かで着実なサービスが、実はユーザーにはありがたいもので、真に役立っていることがよくわかります。また、図書室にこもり切らない広がりがあるのもいいですね。

EBM

司会：最近話題になっている Evidence-Based Medicine（EBM）では、図書館員の役割に期待がかかっています。これについて如何に取り組んでいくべきか、首藤さん、松本さんにお考えをお聞きしましょう。

首藤：EBM は玉石混淆、膨大な情報の中から科学的根拠に基づいた情報を選び出し、現実の臨床課題に適用するという一つの考え方および手法です。私は京大の臨床疫学セミナー、EBL 研究会の CASP ワークショップ、また、「慢性関節リウマチ診療ガイドライン」策定のための文献検索作業等に参加して EBM のためのステップを経験しました。一言で言えば、これはとても面白く、まさに「目からうろこ」の体験でした。これの利点は、私たちが日頃無意識に頭の中で行っている作業過程を、目に見える形で具体化し、ステップを踏んで進むことによって、見落としや主観による偏りをかなり排除できることです。この過程ではまず文献検索が重要視され、図書館員の役割が大きいとされていますので、医療の中で病院図書館員の存在意義を示すためにもぜひ取り組むべき課題であると思います。現在、いろいろなグループが全国各地で研修会、ワークショップを開催しておりますので、ぜひ一度参加されることをお勧めいたします。病図協でも何か企画できたらいいですよね。

松本：私も、首藤さんが今述べられたセミナーやワークショップ、文献検索作業等に参加しました。データベースを使って EBM を指向した文献を探すという作業に携わったことで、Pub Med、医中誌 Web などの検索システムや検索技術を学ぶことができ、業務上大変プラスになりました。また、EBM を理解する上でも随分役立ちました。病図協の研修会や勉強会で、EBM のための情報検索実習をぜひ取り上げてほしいと思います。ただし図書館員としての役割については現在模索中です。

司会：京大とのEBMワーキンググループ活動では、お二人には試行錯誤の当初からご協力いただきありがとうございました。この活動は2年前に、診療ガイドライン策定のための文献検索作業から始まりました。その後、お二人の発言にもあるように、大学院でのEBMワークショップへの協力、データ処理作業、また大学側からは、研修会講師や会誌への啓蒙記事の執筆など、活動の幅も広がっています。この間、病図協内外の図書館員が延べ9名、また今年度は新たに3名の方々が何らかの形で参加されます。厳密な作業も伴う活動だけに一度に多くの図書館員の参加は困難ですが、徐々に経験者を増やしていきたいと思っています。

EBMを学ぶ方法は、書物に拠ることも大事ですが、それ以上にまずは各種のEBMワークショップに参加する、あるいは文献検索のグループ作業に積極的に加わるという体験的方法が効果的でしょうね。何といっても、図書館員だけの狭い世界にこもらず、医学研究者も含めた幅広い関連分野の人たちと知的交流ができるのが楽しいことでもありますね。今後、病図協の研修活動の中でも大いに取り入れたいテーマだと思っています。

V．今後の取り組み

司会：日常の図書館業務において、現在、手近なところから取り組もうとしていることがあれば教えていただきたいと思います。併せて、将来的な病院図書館の理想像についても触れていただければありがたいのですが。

山室：現在の病院の事情から図書室の存在が非常に危ぶまれています。担当者についても、協議会設立当時は司書2名という病院がいくつかありましたが、現在では司書2名というところはほとんどなくなり、常勤職員からパート職員や人材派遣職員となった病院が増えてきています。

そのような状況の中で図書室を存続させるためには、病院の目的に沿ったサービスを展開させていかねば無理だと思います。図書室だけが理想像を掲げてアカデミックになっていては取り残され、病院のお荷物になってしまいます。情報化が進むにしたがって、医師たちはこれまでのように図書室の援助を受けなくても、必要な情報が入手できる時代になってしまいました。病院の方向が患者サービス、地域医療に向けられているならば、図書室もそれを踏まえて、患者サービスと地域サービスの一端を担う方向にシフトしなければならないと思います。

日本の公共図書館でも、すでに医学中央雑誌のWeb検索ができ、一般の人でもNACSISで必要な医学情報の所蔵館を調べることができます。しかし医学情報を公開している図書館が少ないので入手は非常に困難です。そのためにも病院図書室を公開するのも良いのではないかと思います。私どもの病院図書室を公開して、医学情報を必要としているのは決して患者さんやその家族だけではないことを知りました。利用者の中には、検索した文献のリストを持った大学院の学生や研究者の利用、仕事上医学資料を必要とする人々が非常に多いのです。

これからの理想の一つとして、地域の人々のために医学図書館としての役割を地域の病院が担っていくならば、病院にとっても図書室の存在価値があるのではないかと思います。公共図書館のサービスはこれからも発展していくでしょうが、どんなに努力しても病院図書室ほどの医学資料は所蔵できません。公共図書館における医学の部分の資料はその地域の病院図書室が受け持つというようなネットワークができないかと思います。できればもう一歩進んで、公共図書館の役割の一部をその地域の病院図書室が担うということで、自治体からの資金援助が少しでも出して貰えないだろうかというのが私の理想です。

司会：インターネットの普及浸透による情報流通の変化、それによる病院図書館サービス変革の必要性、その中で公共図書館との役割分担への提案など、示唆的なお話をありがとうござい

ました。やはり、これまでのように院内だけに限らず、「地域」への医学情報サービスも念頭において今後の病院図書館を考えていくべきだということのようですね。

司会：今後の病院図書館活動を進めていく上で、この他、何か付け加えることがありましたら、どなたでもご助言、ご示唆をいただければありがたく思います。

山室：皆さんご存知の指揮者、小澤征爾さんから「オーケストラの楽団員はそれぞれ自分の技術を磨き、高い水準の技術を持つことに専念している。しかし自分の技術を音楽にして一般の人に聴かせて喜ばせるということを忘れている。」という言葉を聞きました。そこで小澤さんは、楽団員を引き連れて地方のお寺や学校で演奏会を開くキャラバンを組織し、聴衆の感激を身近に感じさせています。「自分たちは何のために技術を磨くのかということを楽団員に学んでもらう」ということでした。私はとても良い教訓だと思います。首藤さんが言われたとおり、私たちも、どんどん研修会に出席して自分たちの技術を磨くことは確かに大事ですが、その能力を利用者に提供して役立たせるという目的を決して忘れてはならないと思います。

司会：図書館員は利用者へのより良きサービス提供のために自己研鑽するのだ、ということを忘れてはならないということですね。この座談会の締めくくりになる教訓のように思います。ありがとうございました。

Ⅵ. むすび

病図協は1974年の秋、日本で初めての病院における図書館ネットワークとして、「近畿」の地で生まれました。そして第100回研修会という記念すべき本日、その創立時から今日まで活躍されてこられた先輩ライブラリアンの貴重なお話を伺うことができました。温故知新という言葉もあるように、約30年前の病図協の草創期を振りかえり現在の課題を見ることによって、将来への展望も開けるのではないかと思っています。

今後の医学医療情報を担う若い皆さま方は、今日の座談会における諸先輩方のお話を参考にしていただき、より良き医療に医学情報分野でますます貢献されることを願って止みません。最後に、新年早々のお忙しい中をご参加いただきご協力いただいた皆さま方に、司会者として心より御礼申しあげます。

◎本稿は当日の座談会の出席者の発言を元に、文意を通りやすくして原稿化してあります。また、質疑応答において業務上の質問がいくつかあり、参加者全員の自己紹介もありましたが、誌面の都合上、割愛しました。

（文責：小田中徹也）